

観戦でなく参戦

8月8日付け朝日新聞夕刊トップ記事の見出しは、「スポーツ観戦 これからは街で」とあった。大型商業施設や駅前などでのスポーツイベントの開催が、近年人気となっている。特に若い世代を集客するねらいで、人の集まる場所に特設の競技スペースをつくるが多くなっている、とか。記事では、コートサイズが比較的狭く、様々な場所での開催が可能な3人制バスケットボールを取り上げ、「これからは人のいるところにスポーツ側が出て行く」という考え方を示した。

ビーチバレー、スケートボード、ボルダリングなども都市型スポーツとして並べ。「これまでのトラディショナルなスポーツだけでは若者のスポーツ離れを食い止められない。スポーツが待ちの姿勢から攻めの姿勢の変化していくことが大事だ」と言う日本アーバンスポーツ支援協議会々長の渡辺守成氏の話しを紹介している。

ぼくはこの記事を読んで、ちょっと違うんじゃないかと感じたのだ。「人の集まる場所に特設の競技スペースをつくること」は、スポーツ観戦者を増やすことにはなるだろうが、スポーツする人を増やすことにはならないと思う。むしろスポーツ離れに拍車をかけるだけではあるまいか。

以前このページに、「サポーターではなくプレイヤーになろう」という趣旨の論評を書いた。人生の主人公は自分自身である。他人様を応援することは、美德の一つではあるが、応援者あるいは観戦者という在りようは、自分自身のアイデンティティになるはずがない。どんなに熱く応援しようと、勝利という果実を手にするのは彼であって自分ではない。敗北という苦い薬を飲めるのも彼であって自分ではない。応援や観戦は舞台の上ですることではない。人生の主人公になりえるはずがない。プレイヤーあるいは参戦者であることこそ、自身のアイデンティティの拠り所だ。

「自分探し」という言葉をよく聞くが、これもまやかしである。探す必要などない。自分はまぎれもなく、そこ、その場にいるではないか。応援や観戦にうつつを抜かしていると、自分を見失ってしまう。プレイヤーになる、参戦者になる、自分の体を動かせば、自分はそのにいることを発見できるだろう。

困ったことに、「体の動かし方が分からない」という方が少なからずいる。そんな方たちへのアドバイス、「山に登ってみませんか」。はじめの一步は高尾山、表参道ともいうべき1号路を登ってみよう。山道具を揃える必要はない。Gパンに運動靴でいいが、ハイヒールはダメ。信じられないことに、ハイヒールで登る女性がいるのだ。新宿から京王線で高尾山口まで行く。改札口を出て右へ5分歩けばケーブルカーとリフト乗り場の清滝駅前。右へ緩やかに登っていくアスファルト舗装の車道が1号路だ。山頂まで約2時間、下りはケーブルカーに乗ってもいいことにする。